

# 松原湊 Q&A

## Q. 江戸時代の松原はどんなところ？

**A.** 江戸時代の松原は、「松原村」という農漁村であると同時に、彦根城に隣接する湖の玄関口「松原湊」でもあったので、城下町に準ずる地域でした。松原湊は、琵琶湖と松原内湖をつなぐ前川沿いの地域を指し、藩の御用を担う船持たちが住んでいたため、年貢を免除されていました（「御城下惣絵図」の赤色部分）。「御城下惣絵図」では空白になっていますが、その奥には、通常どおり年貢がかかる集落（年貢地）が広がっていました。

## Q. 明治時代以降の松原はどう変わった？

**A.** 江戸時代には水運の拠点として栄えた松原でしたが、明治時代になると港が狭く蒸気船が入れないため、長曾根に港が移りました。昭和の初めには彦根港湾がつくられ、松原の回船橋は彦根の名所になりました。そして、昭和44年には松原に新しい彦根港がつくられ、現在に至っています。船の役割は、物資の輸送や移動手段から観光中心へと大きく変わりましたが、今も昔も彦根と琵琶湖を結ぶ場所として親しまれています。

## Q. 年貢米を集める「松原御蔵」「米宿」とは？

**A.** 彦根藩領の村々のうち、藩主の直轄地からは松原御蔵などの彦根城の蔵へ、家臣の領地からは城下町の武家屋敷へ、それぞれ年貢が納められました。当時は船での輸送が中心だったので、松原湊にはたくさんの村から28万俵もの年貢米が集まってきました。そこで、前川沿いに蔵を持つ人々は、米を預かって複数の納入先ごとに仕分けをする、配送センターのような仕事（米宿）をするようになりました。また、船を使って、松原御蔵への米の搬入・搬出に従事する村人もいました。



▲彦根城下町 水上運送の流れ

## ぶらひこねマップ的 まち歩きのポイント

### 1. 港ならではのポイントを見つけよう！

今も残る水主屋敷や蔵、船板堀、船が係留された水辺の風景など、港町らしい景色を見つけてみましょう。埋め立てられた水路跡に注目すると、湖に密着した昔の生活が見えてきます。



### 2. 路地の世界を楽しもう！

御城下惣絵図には「除地」の部分しか描かれていませんが、その裏側にも松原村の集落が広がっていました。城下町とは一味違う、複雑に入り組んだ路地が今も変わらず残っています。



※路地は生活の場です。マナーを守って散策しましょう。

### 3. 小さな発見を楽しもう！

民家の屋根の上にある鐘馗さんや七福神、道端で人々を見守るお地蔵さん、昔懐かしい看板、ちょっと不思議な構築物（トマソン）など、自分だけの発見を楽しみましょう。

## 松原湊マップへのアクセス



JR・近江鉄道彦根駅から徒歩約30分  
彦根駅から路線バス（南彦根ヘルロード線または彦根市立病院線）で約8分「視覚障害者センター下車」

## 「ぶらひこねプロジェクト」とは？

まち遺産ネットひこねは、彦根のまちに残る歴史的な遺産を再発見し、紹介していく市民団体です。これまでに「鐘馗さんマップ」「彦根城外堀マップ」など8種類のマップを制作し、まち歩きイベントの開催などを通じて、古地図を使ったまち歩きの楽しさを発信しています。

まち遺産ネットひこねホームページ  
[http://www.geocities.jp/machiisan\\_hikone/](http://www.geocities.jp/machiisan_hikone/)



2016年12月31日 初版発行

制作 まち遺産ネットひこね（文・写真 鈴木達也）

### 参考文献

渡辺恒一「彦根藩領近江国松原村の社会構造と米宿の機能」（青柳周一ほか編『江戸時代 近江の商いと暮らし』サンライズ出版、2016年）／『新修彦根市史 第2巻 通史編近世』（彦根市、2008年）／『新修彦根市史 第4巻 通史編現代』（彦根市、2015年）／『新修彦根市史 第10巻 景観編』（彦根市、2011年）／『彦根明治の古地図 三』（彦根市、2003年）／武邑尚彦監修『写真アルバム 彦根・犬上・愛知の昭和』（いき出版、2012年）前川与市『松原町概略史』（1965年）彦根史談会編『城下町彦根一街道と町並一』（サンライズ出版、2002年）／細馬宏通『絵はがきのなかの彦根』（サンライズ出版、2007年）／三尾次郎『武家下屋敷の分布から見た彦根城下町の水利について』（『淡海文化財論叢 第4巻』、2012年）

このマップは、彦根市男女共同参画センターウィズ市民企画講座の一環として、助成を受けて制作しました。ご協力いただいた講座参加者の皆様には、心より御礼申し上げます。「御城下惣絵図」は彦根城博物館、「松原村御除地絵図」は彦根市立図書館の許可を得て掲載していますので、無断転載はご遠慮ください。画像を使用する場合は所蔵者にご連絡ください。



# ひこね 松原湊 マップ

Matsubara Port Map



古地図で楽しむまち歩き  
ぶらひこねマップ コース 9

9



彦根の湖の玄関口へようこそ！江戸時代の松原湊は、年貢米などたくさんの物資が集まる水運の拠点で、城下町の中にある港町でした。今も残る水辺の風景、水主屋敷や蔵などの建物、そして埋め立てられた水路跡から、琵琶湖と人々の生活が密着していた時代を想像してみましょう。





**お浜御殿(松原下屋敷)**  
1810年頃にできた井伊家の下屋敷。松原内湖から琵琶湖へ流れる水を引き入れて庭園をつくっていた。船着場があり、城からは船で行き来できた。国指定名勝。(春と秋に特別公開)



**御門番屋敷跡**  
松原口御門の門番をつとめた家臣の屋敷地。1653年、2代藩主井伊直孝の指示で設置された。建物は建て替えられているが、現在も地割が残っている。



**木俣土佐下屋敷跡**  
現在では多くの宅地に分割されて面影がないが、筆頭家老・木俣家の下屋敷(別邸)があった。隣接する道は水路跡で、ここから庭に水を引いていたと考えられる。



**春日神社**  
その歴史は彦根城築城のはるか昔、古代にさかのぼる。境内が水路に囲まれていたが、戦後に埋め立てられた。市指定保存樹のフジがみどころ。



**水路跡**  
絵図では省略されているところにも、集落や畑が広がっていた。かつては水路が張り巡らされ、農作物の運搬にも使われたが、戦後に埋め立てられた。

**江戸時代の彦根 御城下惣絵図(部分)**



**ごじょうかそうえず 御城下惣絵図とは?**

江戸時代の彦根城下町の様子をもっとも詳細に伝える古地図。天保7年(1836)、彦根藩の普請奉行らによって作られた。赤色の部分は、松原村のうち年貢が免除された「除地」を表す。その北側にも集落(年貢地)があったが、城下町ではないため省略されている。  
彦根城博物館所蔵 画像提供:彦根城博物館/DNPartoom

**現在の彦根**



**凡例**

- 土塁跡
- 水路跡
- 鐘造さんのある建物
- お地藏さん
- おすすめ撮影スポット
- 江戸時代はなかった道
- 思案町
- 松原村の中の地区名



**彦根港**  
昭和44年に完成した現在の彦根港。それまでの港(旧彦根港湾)は船町交差点西側にあったが、大型観光船が発着できるよう、新しい港がつけられた。

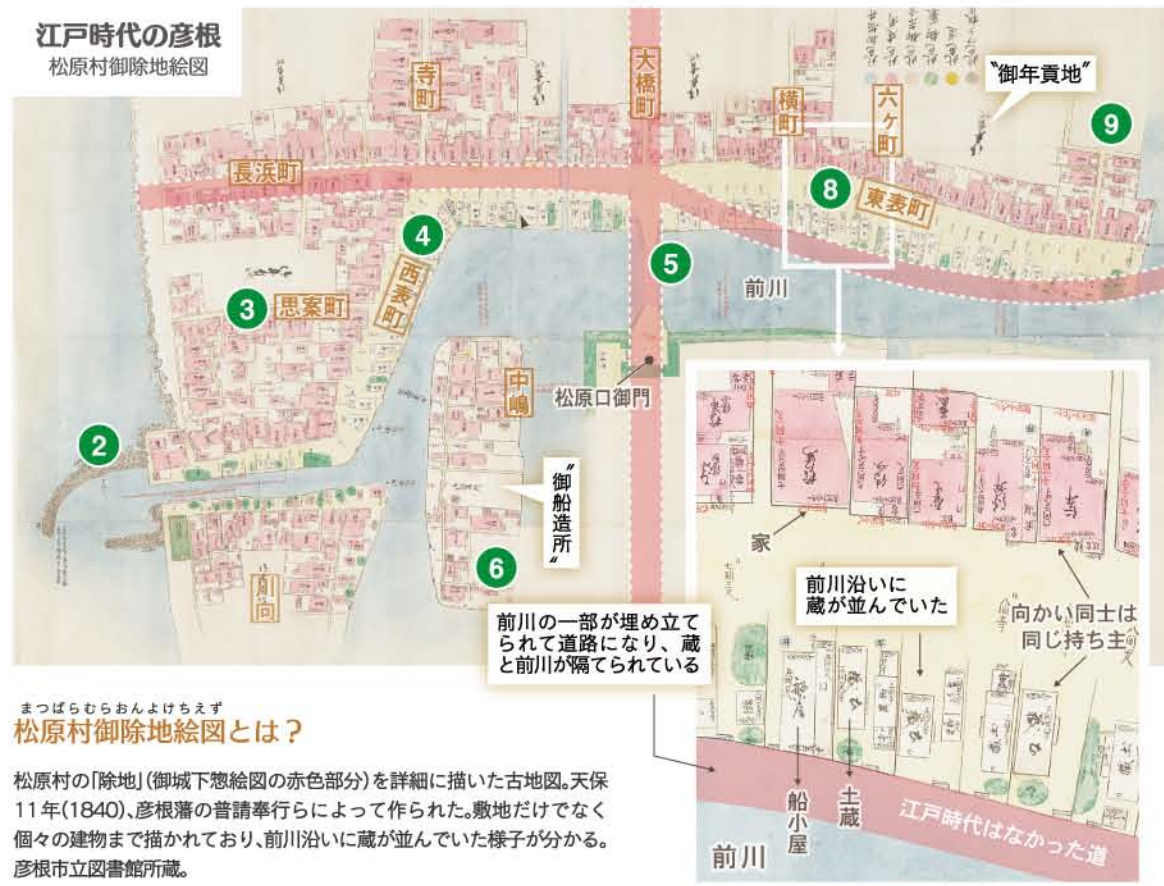


**湖月楼納涼台跡**  
湖月楼は明治22年創業の料理屋で、夏には納涼台で琵琶湖を眺めながら旬の魚を楽しむことができた。納涼台は、昭和40年代の彦根港建設まで続いた。



**思案町**  
松原村の集落は、小さな単位の地区に分かれていた。思案町はそのうちの1つ。路地を歩くと、古い屋敷や蔵が見られる。

**江戸時代の彦根 松原村御除地絵図**



**ごじょうかそうえず 松原村御除地絵図とは?**

松原村の「除地」(御城下惣絵図の赤色部分)を詳細に描いた古地図。天保11年(1840)、彦根藩の普請奉行らによって作られた。敷地だけでなく、個々の建物まで描かれており、前川沿いに蔵が並んでいた様子が分かる。彦根市立図書館所蔵。

「御年貢地」

前川の一部が埋め立てられて道路になり、蔵と前川が隔てられている

前川沿いに蔵が並んでいた

向かい同士は同じ持ち主

江戸時代はなかった道



**東表町の米宿跡**  
家並み(写真左)の向かい側の前川沿いに蔵(同右)が並び、「米宿」の機能を担っていた。古い建物が数棟現存。前川の一部が埋め立てられ、広い道路になった。



**松原御蔵跡**  
低湿地を造成した島状の土地につくられた彦根城の米蔵。彦根藩領のうち、藩主直轄地の村々からの年貢米を収納した。現在、滋賀大学のグラウンドとなっている。



**中嶋**  
現在は陸続きになっているが、かつては独立した島だった。島の中央付近には「御船造所」があった。家屋が密集した路地や、島と周囲との高低差が残っている。



**西表町の米宿跡**  
家並み(写真右)から道を挟んだ向かい側の前川沿いには蔵(同左)が並び、年貢米を保管する「米宿」の機能を担っていた。現在も数棟の蔵が残っている。



**旧磯崎家住宅**  
現存する水主頭の家。門の奥に主屋を配置する武家屋敷のスタイルになっている。1843年に建てられたとみられる。市指定文化財。



**水主町**  
船奉行配下の家臣「水主衆」の屋敷地。藩の専用船の船頭や漕手をつとめた。2本の道に沿って整然と屋敷が並べられ、現在も古い建物が一部残っている。



**松原橋**  
城の松原口御門と集落を結ぶ橋。江戸時代はこの手前で小さな船に積み替えた。昭和2~44年の旧彦根港湾の時代は、船が通るたびに人力で回転する「回転橋」だった。  
昭和42年の回転橋(渋谷博氏撮影)